

文字になづめる後のくせなり、今世にも、菜を字音にて佐伊と云ときは、魚にも、萬葉十一二丁十
に朝魚夕菜、これ朝も夕も那は一なるに、魚と菜と字を替て書るは、魚菜に涉る名なるが故なり、さて其那の中に、菜よりも魚をば殊に賞て、美き物とする故に、ほめて眞那とは云り、故麻那
限りて、菜にはわたらぬ名なり、今世に麻那箸、麻那

〔萬葉集五〕那板など云も、魚を料理する具に限れる名なり、

〔萬葉集雜歌〕憶良聞○中謹以三首之鄙歌欲寫五藏之鬱結其歌曰、
多良志比賣可尾能美許等○神功能奈都良須等、美多々志世利斯伊志遠多禮美吉、

〔大上薦御名之事〕女房ことば

一さかな。こんとも。御さかなとも。

一うほ。御まな。

〔蓮步色葉集登斗々南朝呼兒呼魚曰斗々類說云、

〔梅園日記〕斗々

按するに、類說は宋の曾慥が編集にて六十卷あり、此文は十三卷に、北戸錄を載て、南朝呼食爲頭、以魚爲斗、梁科律生魚若干斗と見えたり、さて南朝にては、宋齊梁陳などは、江南に都食をかぞふるには、幾頭といひ魚をかぞふるには、幾斗といひしひ也、魚を斗といひたるにはあらず、其證は上件の事を北戸錄全本にて見れば、下巻にありて云、前朝短書雜說、即有呼食爲頭、梁元帝謝賜淨饌、金昇流味、漿含都蔗味、資石蜜、父謝資功德食一頭、云天厨淨饌、菴以魚爲斗、體若干斗、とあるにて知べし、また墨莊漫錄云、吳中魚市以斗計、一斗爲松陵唱和皮日休釣侶詩云、一斗霜鱗換濁醪、注云、吳中買魚論、斗酒卽稱斤、其來遠矣、通雅に吳中市魚以斗計、一爲二升半とある升は、斤の誤なり、これにていよ／＼明らか也、

〔下學集上〕雜喫

〔下學集氣形〕雜喫

〔運步色葉集佐サ〕雜喫